

横浜市民ギャラリーコレクション展2023

描きたい風景

Scenery That Inspires Artists



ごあいさつ

横浜市民ギャラリーの約1,300点の所蔵作品は、1964年の開館以来、企画展や国際展等を機に収蔵されたものです。本年は「描きたい風景」と題し、横浜を中心に国内から国外まで、実際の風景をもとに描かれた作品にスポットを当てます。

アーティストはどのような風景に心を惹かれ、創作意欲を掻き立てられたのでしょうか。3つのセクション—「描きたい『横浜』—山下・山手エリア」「スケッチで描く街」「旅人のまなざし」により、横浜らしさあふれる風景や日常の街角、異国の旅先で出会った景色を描いた油彩、水彩・素描、版画などをご紹介します。アーティストと視点を共にしながら、散歩や旅を楽しむようにお楽しみください。あわせて、横浜生まれの日本画家・宮本昌雄の特集展示では、横浜・子安付近の工場風景を描いた《工場》シリーズを中心に展示します。また、クラウドファンディングのご寄附により修復が実現した作品2点（三橋兄弟治《教会の見える風景》1939年、柴田善登《山下公園の五月》1969年）を本展にて修復後初披露します。最後になりましたが、本展のためにご尽力いただいた関係者、関係機関の皆様にご心より御礼申し上げます。

横浜市民ギャラリー



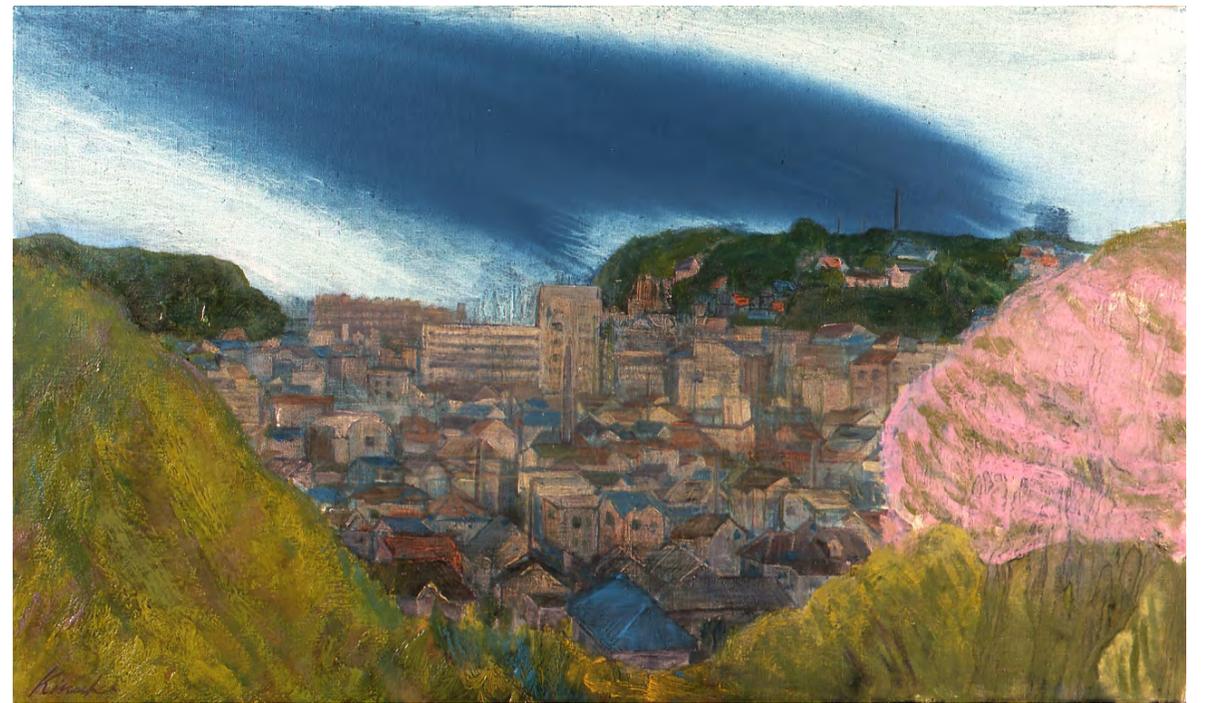
1

1 描きたい「横浜」—山下・山手エリア

横浜市民ギャラリーの収蔵作品には横浜の街を描いたものが多数ありますが、なかでも山下・山手エリアは多くのアーティストが画題としてきました。古くより「バンド(海岸通り)とブラフ(山の手)」として対照的に呼ばれたこの地域は、開港以降の横浜発展の中心地であり、居住者、来訪者を問わず多くの人が思い浮かべる代表的な横浜風景でしょう。1930年に開園した山下公園は、関東大震災で生じた大量の瓦礫を用いて造成されました。添田定夫(1916-2009)は、木立の向こうに海が穏やかに輝く春の山下公園を多彩な青色を用いて透明感いっぱいに描いています。

街と海が共にある清々しい景色は、30年以上を経ても変わらぬ印象を与えます。外国人居留地時代の歴史や文化を遺す山手の丘は、教会や邸宅など西洋建築が並ぶ緑豊かな文教地区です。水彩画家・三橋兄弟治(1911-1996)の《教会の見える風景》は、尾根に建つカトリック山手教会へと視線を集める構図と鮮やかな色彩で、その戦前の美しい街並みを伝えています(表紙作品)。また、この地に居住した遠藤典太(1903-1991)や江見絹子(1923-2015)など、様々なアーティストが山手の魅力を描きました。

1 添田定夫 《春光の横浜港》
1988年 油彩、キャンバス
97.2×130.2cm



2



3



4



5



6

- 2 江見絹子 《丘(山手から本牧方面を見る)》
1988年 油彩、キャンバス
66.7×110.7cm
- 3 小山オサム 《横浜風景(大橋橋より)》
1988年 油彩、キャンバス
91.5×117.2cm
- 4 岩田栄之助 《終戦後の横浜港》
1947年 油彩、キャンバス
65.6×80.5cm
- 5 中谷龍一 《山手風景》
1988年 油彩、キャンバス
117.0×91.0cm
- 6 遠藤典太 《麦田トンネル》
1988年 油彩、キャンバス
80.9×100.4cm



7



8

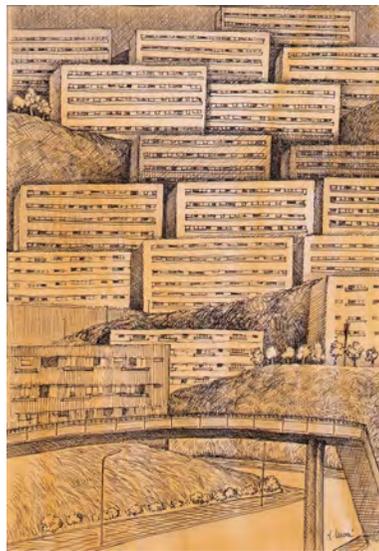
2 スケッチで描く街

「描きたい風景」は、身近な暮らしの中にもたくさんあるでしょう。アーティストが街を歩き、手を動かした臨場感が感じられるスケッチからは、かじこまらない普段着のような親しみが感じられます。本章でご紹介するのは、横浜開港120周年の1979年に当館で開催された「横浜百景展」の出品作です。この展覧会では、当時横浜で活躍した洋画、日本画などの中堅作家43名が、市内全区にわたり様々な横浜風景を描きました。

田代利夫(1917-1983)の《保土ヶ谷駅東口》、安保健二(1922-1994)の《漁船の棧橋(鶴見川下流・生麦)》のように今では様変わりした昔なつかしい風景や、森秀男(1928-1983)による1970年代に発展した洋光台団地の林立する様子など、これらの作品は時代とともに移り変わる日常風景の貴重な記録でもあります。鉛筆・ペン・クレヨン・水彩など画材もいろいろ、個性が光る作品を通して街の魅力を再発見してみてください。



9



10

- 7 安保健二 《漁船の棧橋(鶴見川下流・生麦)》
1979年 鉛筆、水彩、紙
24.1×32.4cm
- 8 田代利夫 《保土ヶ谷駅東口》
1979年 クレヨン、水彩、紙
25.4×34.2cm
- 9 山崎秀夫 《くらやみ坂》
1979年 鉛筆、水彩、紙
35.2×27.2cm
- 10 森秀男 《限りない街(洋光台団地)》
1979年 鉛筆、インク、水彩、紙
38.1×25.3cm

3 旅人のまなざし

旅先の風景や旅の中で得た印象は、しばしばアーティストの創作の源泉となります。本セクションでは、国外の旅のなかで描かれた作品を紹介します。画家の視線を通して見る各地の風景は、時代を経た今も新鮮に映ります。入江正巳(1924-2004)は、韓国・京畿道水原市に残る遺跡・華城の水門である華虹門を描きました。第二次大戦や朝鮮戦争では被害を受けた一帯ですが、本作ではあたたかな季節を思わせる明るさ、瑞々しさが存分に表されています。日本と中国の木版技法を融合させ制作した北岡文雄(1918-2007)は、長い歴史を持つ聖シュテファン大聖堂を、後方の路地より垣間見るような独特な構図で描いています。《紫の門》は、モロッコの都市フェズの旧市街に通じるブー・ジュールド門をとらえた作品です。今関一馬(1926-2009)はヨーロッパの風土に魅せられ、明るく多彩な色彩を用いて同地の風景を多く描きました。本作からも、気候や風土を反映した今関の色彩感覚を感じ取ることができます。



11

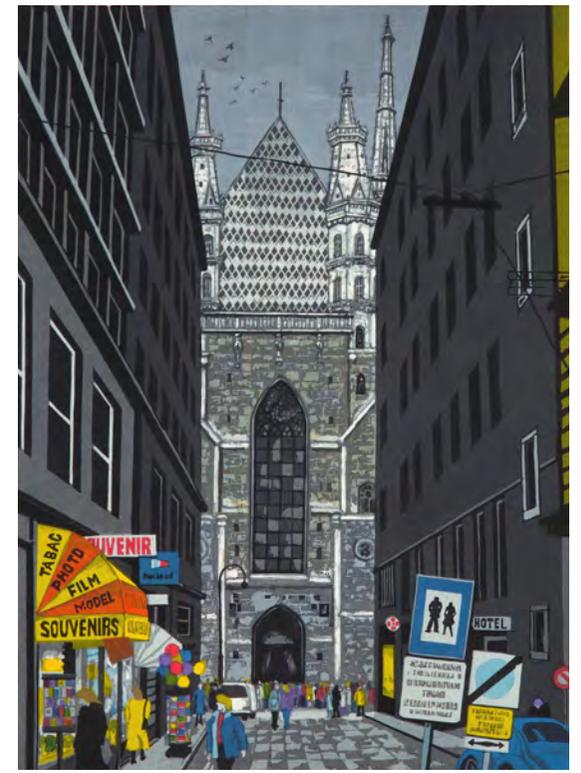


12

- 11 入江正巳 《華虹門》
1973年 紙本着彩
81.0×101.0cm
- 12 安保健二 《塔のある港(オランダ)》
1986年 油彩、キャンバス
112.2×162.6cm
- 13 今関一馬 《紫の門》
1975年 油彩、キャンバス
50.5×50.0cm
- 14 北岡文雄 《聖シュテファン寺院(ウィーン)》
1990年 木版
56.7×41.7cm



13



14



15

4 特集展示 宮本昌雄 — 横浜を描いた画家

宮本昌雄は、横浜で生涯を過ごした日本画家です。現在の関内駅ほど近くに生まれ、1923年の関東大震災で両親を失った後は姉の夫のもとで育ちました。幼い頃より絵が好きで、当時大岡尋常小学校教諭だった片岡球子(1905-2008)から紹介され、1930年より中島清之(1899-1989)に指導を受けます。県立商工実習学校を卒業後18歳で第4回横浜美術展(ハマ展)に入選しますが、1938年に入隊後引き続き召集され、日中戦争・太平洋戦争のため中国南部、ベトナムやニューギニアで従軍、日本に帰国できた年には29歳になっていました。その後日本鋼管株式会社子安工場に勤務しながら再び絵筆をとり、1958年には第43回院展で《工場58》が初入選を果たしました。

工場は宮本の生活の中で多くを占める、勤務地の風景ですが、モチーフを取捨選択した大胆な構図が

とられます。また直線的な線描や、地面やコンクリート、金属等硬質な箇所を中心に追及された絵肌等、日本画の枠にとどまらない実験的な作品です。宮本は退職までの間、「工場シリーズ」を多く描きました。しかし55歳で退職後に山手に移り住むと、教会や洋風の家、花や子ども、女性らを描いた風景を発表するようになります。一見工場シリーズとは印象を異にしますが、画面奥に視線を誘導するように道を入れる構図や、パースをとった建築物の描き方に共通点を見出すことができます。まさに高度成長期に日本の発展を支えた工場群を迫りくるような物質感で描いた工場シリーズと、開国以降・外国人居留地だったことを背景に、ハイカラな雰囲気を持つ山手を色彩と情感豊かに描いた山手シリーズ。対象的な両シリーズですが、使用される色彩からも宮本の心情の変化が感じられるようです。



16



17



18



19

- 15 宮本昌雄 《工場 58》
1958年 紙本着彩、パネル
117.1×170.6cm
- 16 宮本昌雄 《工場 74》
1974年 紙本着彩、パネル
182.7×183.3cm
- 17 宮本昌雄 《よこはま鶴見工場八景G》
1985年 紙本着彩
31.8×33.2cm
- 18 宮本昌雄 《横浜山手春秋譜》
1979年 紙本着彩、パネル
182.3×228.0cm
- 19 宮本昌雄 《市庁舎》
1979年 パステル、インク、紙
31.5×41.9cm

[略歴]

宮本昌雄(みやもと・まさお)

- 1917年 横浜市中区生まれ
- 1930年 中島清之に師事
- 1934年 神奈川県立商工実習学校商業部卒業
- 1935年 第4回横浜美術展に初入選
- 1938年 千葉近衛師団入隊、2年後に除隊後に召集され日中戦争・太平洋戦争に従軍
- 1946年 帰国
- 1948年 日本鋼管株式会社就職
- 1955年 新制作展入選
- 1956年 ハマ展会員推挙
- 1957年 第12回春の小品展(現・春の院展)にて《花》が初入選
- 1958年 第43回院展にて《工場58》が初入選
- 1960年 日本美術院院友推挙
- 1972年 日本鋼管株式会社定年退職
- 1997年 「現代版“横浜絵”のこころ 宮本昌雄展」(横浜市民ギャラリー)
- 2016年 逝去

相笠昌義 インタビュー

当館では2014年より、企画展にあわせ横浜市民ギャラリーにゆかりのある方々のインタビューをおこなっています。今回は出品作家の相笠昌義氏にお話をお聞きました。

※インタビューは映像化し、展示会場で上映します。
また、横浜市民ギャラリーホームページ上で公開する予定です。

— 描くこと

絵を描くのが特に好きじゃなかったのですが、描くと褒められました。高校の時の先生にも、父親が薦めた早稲田大学よりも藝大に受かる可能性があると言われて、藝大を目指すようになりました。周りから言われて絵描きになったようなものです。

— 疎開

小学校に入る前のことですが、東京にはB29が爆弾を落としていきました。泣きながら上野の山に逃げましたが、そこも危ないとなって福島に疎開しました。小学校へは福島で上がりました。学校が徒歩30分以上と遠いので途中のくぬぎ林等を見ながら通うと、蝶やクワガタ等甲虫がいて、自然とそういうものが好きになりました。

— 昆虫(甲虫)

甲虫は重量感があって格好良いんです。蝶は色が綺麗なのですが、クワガタ等は牙が立派なものがあり変化がある。虫も含めて自然の色には複雑なものがあるので、色をつける時の参考になります。私は昔から人間が好きではないので、昆虫を見ると心が和やかになるんです。そのうち見ているだけでなく、捕まえて標本にするようになりました。



相笠氏製作の標本(撮影:播本和宜)

— 人間嫌い

画家が人物を描くのに二つのタイプがあります。人間が好きな絵描きと嫌いな絵描き。ルノワールなどは人間



撮影:播本和宜

が好きでしょう。ところがブリューゲルやドガは人間嫌いだと思います。だけど人間をテーマにしている。私も後者の考え方に近いです。理想化というのは現実感がない。ブリューゲルやドガの、美化しないタイプの方が私と共通項を持っているんじゃないかと思っています。

— 影響を受けた画家

北斎はあらゆるものを描く幅の広さに感心しています。どの作品をみても似たようなものはなく、これだけ幅広く人物を描けるのはすごいと感心しています。それからフェルメールは実物を見た時の絵の重量感がすごかった。明るい絵で重量感がある作品は、あまり他にはありません。色も美しい。

— 東京藝術大学時代

大学受験の頃には、篠原有司男とかアヴァンギャルドの連中とばかり付き合っていました。それで入試でもアヴァンギャルド風に人物を描いたら落とされちゃって。次の一年は素直に描くようにしました。大学卒業の頃の絵はアンフォルメルで、今とは全然違います。その頃の絵がいいという人もたまにいますね。

— コラージュ

大学で教わったのが小磯良平先生だったので、卒業後に小磯先生の設立した新制作協会に出品しましたが落選しました。油絵を描いて落ちてしまったので、油絵具を触りたくなくなりました。でも何か仕事をしたかったのでカメラ雑誌を買い込み、切り貼りしてコラージュを始めました。コラージュだとわけのわからない形になるでしょう。人間の顔なんか作る必要がないんだから。でもちゃんとやっていくと色々なイメージができます。



相笠昌義 《文明嫌悪症・都会人のためのモニュメントIII》
1965年 コラージュ
75.0×61.5cm

— 版画

版画は独学で学びました。リトグラフは平面に描くので、油絵と変わらない。でもエッチングは手で彫って、腐蝕する時間で全然線が違ったりするし、形が明快に決められます。版画展に出品したら、事務局から電話で、私の作品を駒井哲郎さんが買ってくれたと連絡がありました。それで駒井さんのところへ行って「この絵は差し上げるからお金はいりません」と言うと、「どれでも君の好きな作品を持っていいよ、お金も払うよ」と言われてね。それで2時間くらい二人で話をしました。初期の版画は「文明恐怖症」というタイトルをつけ、頭の中でイメージをつくっていましたが、しばらくしてやっぱり人物も描くようになりました。そこで都会生活が嫌だし人間が好きではないので「文明嫌悪症」という名前をつけました。この作品をアンデパンダン展に出したら、美術評論家の瀬木慎一さんが『美術手帖』に取り上げてくれました。23、4歳の頃の事です。

— 「日常生活」シリーズ

我々の生活が日常だから、ごく当たり前の誰でも年中見ている風景にしようと思いました。見慣れて何でもないものを描こう。「日常生活」とつけると何でも日常生活になります。日常ってなんだろう、人間の暮らしてなんだろうと、それはいつも考えています。画中に時折自分を描き入れるのは、客観的になるからです。主観的に描くのは簡単だけど、客観的に描くのは難しいですよ。



相笠昌義 《日常生活・車内にて・春》
1978年 油彩、キャンパス
40.9×53.0cm

— 制作のイメージとスケッチ

パツパツと思い浮かびます。考えなくても一日3~4個は浮かんでくる。最初はスケッチブックにメモだけして、段々形がはっきりしてきます。イメージと形が少し見えてきたら油絵を描くようにしています。だからイメージが湧かなくなるのが一番怖い。スケッチはイメージを頭の中にたくさん入れるために描いていて、あらゆるものを描きますね。カメラと眼では、遠近法も色彩も違います。だから肉眼で見た色、形、遠近法を信じた方がいいよ、と学生にも言っています。カメラを見て描いた絵ってすぐわかるでしょう。スケッチを見せる画家はあまりいないと思います。本画よりも実力がわかってしまうので。だから私は外国に行っても色々な作家のスケッチを見るのが好きです。



相笠氏のスケッチブックより



相笠昌義 《山下公園の日曜日》
1988年 エッチング、アクアチント
30.0×73.9cm 横浜市民ギャラリー蔵

—「描きたい風景」

強いて言えば人間のいる風景です。自然の中でもないし、大都会の中でもないけど、人間を描かないと風景を描いてもつまらない。人間をたくさん描くのは、智恵があたり金を持っていたりしても基本的にはみな同じ人間だという考えが頭の中にいつもあります。若い頃は観念的な理屈を考えて描いていましたが、今はあまり理屈を考えません。段々素直に描くようになりまし。素直になって絵の魅力がなくなったらしょうがないですが、眼が素直になったと思います。絵には必要のないものを描いてはいけません。ところが必要なことだけ描くというのは結構難しい。細かく描くほうが楽なんですよ。

—《山下公園の日曜日》

あの作品は頼まれて描いたのかな。ああいった海岸には老若男女、関係なくいるでしょう。それを描きたかった。だから何度も山下公園に通って、人間を色々見ました。

【相笠昌義 プロフィール】

1939年 東京生まれ
1962年 東京藝術大学美術学部油画科卒業
日本版画協会第30回展に初出品、初入選
この頃より油彩から離れる
1967年 日本版画協会会友(1969年会員)
1968年 初個展を開催(銀芳堂画廊/東京)
1971年 第6回国際青年美術家展に入選(第7回展も)
この頃(日常生活)シリーズ開始
1978年 女子美術大学非常勤講師(1982年まで)
1979年 第29回芸術選奨文部大臣新人賞受賞
文化庁芸術家在外研修員としてスペインに1年間滞る
1982年 第25回安井賞展安井賞受賞
1984年 多摩美術大学非常勤講師(1986年助教授、1988年教授)
1986年 毎日新聞の連載小説「村村良『岬一郎の抵抗』の挿絵を担当(2年間)

—海外での取材

何か国ぐらい行ったかな。スペインも行ったしエジプトも行きました。東欧、メキシコ、インド、南米…あまり行ってない国はないんじゃないかな。スケッチをしていると人が寄ってきて、雑談しながら描いていると親しくなれます。ヨーロッパだと人物を描いていると、とても尊敬されます。

—今後の制作

自分でもわからないですね。こういうものを描きたいと具体的に見えすぎようになって、頭打ちになると怖いから。できるだけ具体的に見えずに、新しいイメージが湧いたらいいなと思います。

2022年12月12日 相笠昌義氏アトリエにて 聞き手・編集:齋藤里紗

1987年 個展「相笠昌義 その世界展」(池田20世紀美術館/静岡)
2004年 個展「相笠昌義-版画・油彩・素描展」(町田市立国際版画美術館)
母校の私立聖学院礼拝堂にステンドグラス制作
2010年 個展「相笠昌義展 日常生活」(損保ジャパン東郷青児美術館)
2015年 目黒区美術館 コレクション展
2016年 「ガラス絵 幻惑の200年史」(府中市美術館)
2018年 「収蔵作品展 日常生活・相笠昌義のまなざし」(東京オペラシティアートギャラリー)
2020年 「コレクション展 日々を象る」(神奈川県立近代美術館 鎌倉別館)
2021年 「受贈記念 コレクター寺田小太郎一難波田龍起、相笠昌義を中心に」(早稲田大学 會津八一記念博物館)
2022年 「相笠昌義 大昆虫展」(座間市民文化会館)

その他、個展・グループ展多数。
主な画集に『相笠昌義 日常生活』(1996年、美術出版社)、
『相笠昌義作品集 描かれた日常 1961-2004』(2004年、美術年鑑社)等

クラウドファンディングによる作品修復のご報告

横浜市民ギャラリーでは今年度、開館以来初の試みとなる「クラウドファンディングによる収蔵作品修復プロジェクト」を実施しました。2022年5月9日～6月30日の間、クラウドファンディングサービスREADYFORのサイト内で資金を募り、目標の140万円を超える1,710,000円が集まりました(公益財団法人横浜市芸術文化振興財団への直接寄附を含む)。対象作品は、三橋兄弟治《教会の見える風景》(1939年)と柴田善登《山下公園の五月》(1969年)の2点です。いずれも十分な修復に加え、美術品輸送専門会社による安全な輸送、額から作品を取り出して行った調査で判明した必要な処置も追加で実施することができました。

修復の過程で、作品について新たにわかったこともあります。《教会の見える風景》は、通常の水彩紙ではなくグレーのボール紙のようなものが使われていました。また《山下公園の五月》では、赤外線ライトで照らすと現在の絵具層の下に、かつて描かれた樹のようなシルエットが見えてきました。

修復をすることは作品を蘇らせて次代に継承することはもちろん、このように新たに得られた情報をもとに研究を深める契機にもなります。当館では今後とも、順次収蔵作品の調査や修復を進めてまいります。



修復後の柴田善登 《山下公園の五月》

柴田作品は汚れが取り除かれ、画面全体が明るくなりました。いずれの作品も、額の修復や額装改善も行いました。三橋兄弟治《教会の見える風景》は、修復後に撮影したデータを表紙に使っています。

修復写真・情報提供:株式会社シー・アール・エス



修復前の《山下公園の五月》



美術品専用車で修復工房に輸送される2点。グレーの箱が新しい中性紙製の保存箱



作品表面を柔らかい刷毛を使ってドライクリーニング(三橋作品)



付着物の除去(三橋作品)



修復前の赤外線撮影(柴田作品)



絵具層に亀裂が生じている箇所を接着(柴田作品)

作品リスト

	作家名	作品名	制作年	技法	サイズ(縦×横)cm
1. 描きたい「横浜」 —山下・山手エリア	相笠 昌義	山下公園の日曜日	1988	エッチング、アクアチント	30.0×73.9
	青木 一美	倉庫と税関	1988	油彩、キャンバス	91.3×91.5
	岩田 栄之助	終戦後の横浜港	1947	油彩、キャンバス	65.6×80.5
	江見 絹子	丘(山手から本牧方面を見る)	1988	油彩、キャンバス	66.7×110.7
	遠藤 典太	妻田トンネル	1988	油彩、キャンバス	80.9×100.4
	小山 オサム	横浜風景(大栈橋より)	1988	油彩、キャンバス	91.5×117.2
	斉藤 カオル	山手教会'88	1988	ドライポイント	37.9×31.0
	櫻庭 彦治	横浜・山手(外人墓地と港)	1963	油彩、キャンバス	111.8×161.3
	柴田 善登	山下公園の五月	1969	油彩、キャンバス	60.0×80.0
	柴田 善登	舟溜り(亀の橋)	1988	油彩、キャンバス	91.5×117.0
	添田 定夫	春光の横浜港	1988	油彩、キャンバス	97.2×130.2
	田中 岑	窓外港 朝	1988	油彩、キャンバス	72.7×60.8
	田辺 謙輔	新山下高速道	1988	油彩、キャンバス	53.3×72.9
	中谷 龍一	山手風景	1988	油彩、キャンバス	117.0×91.0
	馬場 構男	雪の教会(山手)	1977	リトグラフ	18.6×21.0
	兵藤 和男	古樹新緑	1965	油彩、キャンバス	61.0×72.9
	三橋 兄弟治	教会の見える風景	1939	水彩、紙	74.0×57.0
	三橋 兄弟治	港	1940	水彩、紙	57.3×75.0
	吉川 啓示	山手残照	1988	紙本着彩	80.5×100.2

2. スケッチで描く街	安保 健二	漁船の栈橋(鶴見川下流・生麦)	1979	鉛筆、水彩、紙	24.1×32.4
	北岡 数彦	海岸通り	1979	インク、紙	31.3×40.1
	島田 四郎	教文センター	1979	水彩、紙	36.6×52.6
	志村 計介	白瀬不動より	1979	ボールペン、水彩、色鉛筆、紙	24.1×33.3
	芹沢 龍吉	三溪園	1979	サインペン、水彩、紙	29.7×44.1
	田代 利夫	保土ヶ谷駅東口	1979	クレヨン、水彩、紙	25.4×34.2
	富岡 克雄	藤棚	1979	鉛筆、水彩、紙	39.3×30.2
	秦 克彦	野島橋展望	1979	鉛筆、インク、墨、紙	29.0×41.8
	濱田 嘉代	境川	1979	水彩、ペン、パステル、紙	38.5×50.7
	森 秀男	限りない街(洋光台団地)	1979	鉛筆、インク、水彩、紙	38.1×25.3
	山崎 秀夫	くらやみ坂	1979	鉛筆、水彩、紙	35.2×27.2

3. 旅人のまなざし	安保 健二	塔のある港(オランダ)	1986	油彩、キャンバス	112.2×162.6
	今関 一馬	紫の門	1975	油彩、キャンバス	50.5×50.0
	入江 正巳	華虹門	1973	紙本着彩	81.0×101.0
	岡野 正樹	島の夕映(イタリア・パーマリア)	1965	油彩、キャンバス	93.0×118.0
	北岡 文雄	朝やけのブルーモスク	1990	木版	56.7×41.7
	北岡 文雄	聖シュテファン寺院(ウィーン)	1990	木版	56.7×41.7
	中谷 龍一	村はずれの家 エルブビュー	1978	油彩、キャンバス	80.4×60.7
	長谷川 潔	窓からの眺め(シャトー・ド・ヴェヌヴェルの窓)	1941	エングレーヴィング	30.4×22.2
	馬場 構男	ロシアのバレード	1990	リトグラフ	28.8×20.2
	馬場 構男	オデッサのバレード	1991	リトグラフ	51.2×64.3
	三橋 兄弟治	アルコス風景	1986	水彩、紙	97.2×145.6

4. 特集展示 宮本昌雄—横浜を描いた画家	宮本 昌雄	工場 58	1958	紙本着彩、パネル	117.1×170.6
	宮本 昌雄	工場 71	1971	紙本着彩、パネル	130.0×160.0
	宮本 昌雄	工場 74	1974	紙本着彩、パネル	182.7×183.3
	宮本 昌雄	旧英国領事館	1979	パステル、インク、紙	41.2×30.8
	宮本 昌雄	市庁舎	1979	パステル、インク、紙	31.5×41.9
	宮本 昌雄	横浜山手春秋譜	1979	紙本着彩、パネル	182.3×228.0
	宮本 昌雄	よこはま鶴見工場八景B	1985	紙本着彩	30.4×31.8
	宮本 昌雄	よこはま鶴見工場八景C	1985	紙本着彩	30.2×31.9
	宮本 昌雄	よこはま鶴見工場八景D	1985	紙本着彩	30.2×31.8
	宮本 昌雄	よこはま鶴見工場八景H	1985	紙本着彩	31.4×33.0
	宮本 昌雄	よこはま鶴見工場八景G	1985	紙本着彩	31.8×33.2
	宮本 昌雄	工場 86	1986	紙本着彩、パネル	100.0×100.0

謝辞	展覧会情報
<p>この展覧会を開催するにあたり、多大なご協力をいただきました次の個人、関係機関に深く感謝申し上げます。(敬称略)</p>	<p>横浜市民ギャラリーコレクション展 2023</p> <h3>描きたい風景 Scenery That Inspires Artists</h3> <p>横浜市民ギャラリー 展示室1、B1</p> <p>2023年2月24日[金]～3月12日[日]</p> <p>10:00～18:00(入場は17:30まで)</p> <p>入場無料 / 会期中無休</p> <p>主催：横浜市民ギャラリー（公益財団法人横浜市芸術文化振興財団／西田装美株式会社 共同事業体）</p>
<p>相笠昌義</p> <p>安倍陽子</p> <p>今関アン</p> <p>入江洋行</p> <p>岩田 梢</p> <p>荻野アンナ</p> <p>加藤孝之</p> <p>小山文大</p> <p>桜庭慎吾</p> <p>中谷 香</p> <p>永峯千尋</p> <p>宮本太郎</p> <p>山崎絵美</p> <p>山田 隆</p>	<p>関連イベント</p> <p>おしゃべりステーション@コレクション展</p> <p>2月26日(日)、3月4日(土)各日13:30～15:30</p> <p>会場：横浜市民ギャラリー1階展示室前スペース、展示室1・B1</p> <p>本展では9名のボランティアが鑑賞サポーターとして活動しています。</p> <p>事前研修を行い、おすすめ作品の紹介文を執筆しました。</p> <p>また上記のとおり、鑑賞サポーターが来場者と作品を見て感じたことをお話ししたり、おすすめ作品の紹介を行うイベントを開催します。</p> <p>鑑賞サポーター：</p> <p>ーノ瀬邦子、大坂恵一、込山由香理、笹倉真理、高橋大、中光千裕、西村健一、平野くみ子、藤原美智子</p>
<p>株式会社シー・アール・エス</p>	<p>学芸員によるギャラリートーク</p> <p>3月4日[土]11:00～11:30</p> <p>会場：横浜市民ギャラリー展示室1・B1</p>

<p>※ 遠藤典太氏、小山オサム氏、田代利夫氏、森秀男氏の著作権継承者について調査しています。</p> <p>ご存じの方がいらっしゃいましたら、横浜市民ギャラリーまでご連絡いただけますと幸いです。</p>
--

<p>学芸担当・執筆：河上祐子(p.4-6)、齋藤里紗(p.7-9)</p> <p>デザイン：北川正(Kitagawa Design Office)</p> <p>印刷：山陽印刷株式会社</p> <p>インタビュー映像制作：播本和宜</p> <p>作品修復報告映像制作：伊藤浩平</p>
<p>編集・発行：横浜市民ギャラリー（公益財団法人横浜市芸術文化振興財団／西田装美株式会社 共同事業体）</p> <p>〒220-0031 横浜市西区宮崎町26番地1</p> <p>TEL 045-315-2828 FAX 045-315-3033</p> <p>https://ycag.yafjp.org/</p> <p>© Yokohama Civic Art Gallery 2023</p>



YOKOHAMA CIVIC ART GALLERY
横浜市民ギャラリー